

鹿島平和研究所叢書

経済外交の 現場を語る

一外交実務家の目

■元外務省経済協力局長・
元在力ナダ・国連大使
菊地清明

112
F711
568

鹿島
平和研究所
叢書

経済外交の現場を語る

一外交実務家の目

■元外務省経済協力局長・元在カナダ・国連大使■

菊地清明



勉誠出版

2003年12月22日

FB

■鹿島平和研究所叢書■
経済外交の現場を語る

——外交実務家の目

財団法人鹿島平和研究所
編者 會長平 泉 渉

発行者 池 嶋 洋 次

発行所 勉誠出版(株)

〒102-0083 東京都千代田区麴町四一八十三六
電話 (〇三) 五二一五一九〇二一(代)

平成十五年七月十五日 初版発行

編集協力 (有)堀江制作

装幀 廣瀬 郁

印刷 モリモト印刷(株)

製本 井上製本所

ISBN4-585-05203-8 C0333

菊地清明

- 一九七五年 經濟協力局長
- 一九七八年 在シンガポール大使
- 一九八〇年 外務審議官
- 一九八二年 在メキシコ大使
- 一九八四年 在カナダ大使
- 一九八六年 在国連大使

深田 宏

- 一九七五年 駐米大使館公使
 - 一九七九年 駐經濟協力開発機構公使
 - 一九八〇年 外務省經濟局長
 - 一九八二年 駐シンガポール大使
 - 一九八四年 駐經濟協力開発機構日本政府代表部（在パリ）大使
 - 一九九〇年 外務省大臣官房審議官
- 駐オーストラリア大使

目次

菊地大使に聞く……………	対談…深田 宏	1
第一回 戦後初期……………		3
第二回 アセアン諸国との経済外交……………		99
第三回 国連大使時代……………		187
日本の経済外交……………	菊地清明	251
一、戦後の経済外交について……………		253
二、一九九〇年以後の日米経済関係……………		279

菊地大使に聞く

菊地 清明

深田 宏

(聞き手)



第一回 戦後初期

深田 菊地さんは昭和二十一年から昭和六十四年まで、外務省ですごされています。この昭和戦後時代というのはどういう時代だったのでしょうか。

菊地 初めから大変大きな問題をぶつけられました。二十世紀の後半、日本は戦後の復興を成し遂げて、もう一九六八年あたりには、西ドイツを追い越して世界第二位の経済大国になった。これはなんといっても日本人の復元力が非常に強かったということじゃないでしょうか。

外務省の役割は、最初は戦後処理です。その後、六〇年代になると、経済外交が非常に華やかになった。それには外務省の経済局、経済協力局というものが何がしかの貢献をした。深田さんもそうですけれど、私なんか戦後の外務省で、これらの問題

に、身をささげることができたのは幸いだったと思います。

私は、一九五〇年に最初のガリオア留学でアメリカに行つて以来、四回にわたつてアメリカに在勤しました。戦後の外交は日米関係を機軸として進められたのであり、その日米関係にインボルブ（係わる）しえたことは、幸いだったと思います。

日米関係の発展に果たした外務省の役割は、大きかったと思います。そして吉田茂さんが堅持した日米協調、日米安保条約というラインをずっと堅持したということは正しい選択だったと思います。

私は「日米同盟至上主義者」ではありません。しかし、現在与えられている選択肢の中で、日米関係を緊密にしていこうということは日本が今後あらゆる分野で活躍していく上で、欠かせない枠組みではないかと、思っています。

外務省に入る

深田 昭和十八年十一月に東京帝国大学の法学部を卒業、外務省に入るのは昭和二十一年十一月ということですが、外務省入りのきっかけは何だったのですか。

菊地 今十八年卒業と言われたんですが、正確に言いますと、昭和十八年仮卒業、昭和

十九年本卒業ということになっています。しかし、それは書類上の話で、私たちは例の学徒動員の組でして、昭和十八年八月にはもう大学を去り、十二月に海軍に入り、「海軍予備学生」になりました。戦争中は台湾の澎湖島、それから高雄におりました。

昭和二十一年四月にやっと復員、そのため昭和二十年に行われた外務省の「特例採用による試験」には間に合わなかった。故郷の仙台で、一時東北終戦連絡事務局の嘱託かなんかをやっておりました。そのうちに高文（高等文官試験）が復活したので、二十一年十一月と思いますが、東北大学で高文の筆記試験を受けました。翌二十二年四月に口頭試験、同じ月に外務省を志願しました。

その時、私は通産省にも同時に願書を出したんですが、外務省の方が先に合格の通知がきたんで、そっちのほうに行ってしまったわけです。

外務省という昭和二十一年組というのは、戦後初めて正式に高文の試験を通ってきたクラスです。クラスはたった六人ですけれども、高文合格者から外務省が採るといえるのは、我々の組とその次の年までしかないわけです。私どもが外務省の研修所に入ったのは四十七年の五月です。それで、我々のクラスは五月会さつきごという会をやっています。戦後採用で一番少ない時。しかも占領下ですから、「日本外交冬の時代」というようなことを言われた時代でした。

深田 その時点で既に英語が非常にお得意だったようですが。

菊地 私の母は学校の先生でした。師範学校で、英語で非常に苦勞したということ、自分の子供には英語で苦勞させたくない、私は小学校の六年くらいから仙台のラサール教会の神父さんに英語と、若干フランス語も習っていました。

深田 外務省を昔から意識されておられたのですか。

菊地 仙台第一中学校には古内広雄さんという先輩がおりまして、この人はドイツ語の達人で、私が東大の時代は、外務省欧亜局第四課長というドイツ担当の課長でした。枢軸派が盛んな頃ですから、飛ぶ鳥を落とすような勢いで颯爽と闊歩しておられた。それを見てうらやましく思ったわけでもないが、外務省というものに関心を持ち始めた。大学に入った当初は、政治学でもやってみようかということ、矢部貞治さんの研究室に入れてもらい、大学に残ろうかななどと考えていたころがあったんです。それが学徒動員ということになって、全とおじやんになった。戦争から帰ってきて、いままさら学者でもあるまいということで、外務省に入ろうかという気になった次第です。

ガリオア留学、第一回生

深田 一九五〇年にはガリオアでアメリカに留学ですね。

菊地 総司令部が文部省かユネスコ協会を通じて留学生を募集したんです。外務省でも、たとえば中川進さんとか、須之部量三さんとかいう大官までもこのテストを受けたわけです。私はそのころ調査第二課にいたんですが、調査二課からは、私だけが通った。私は、アメリカ人学生と比較すれば老学生の部類でしたけれども、それでも運良く、ちようどその頃、できて四、五年しか経っていないスクール・オブ・アドヴァンスト・インターナショナル・スタディーズサ・アイ・ヌス略称S・A・I・Sという、当時はまだインディペンデント・グラジュエイト・スクールで、あとでジョンズ・ホプキンス大学に所属するんですけれども、そこへ行けと言われたんです。これは私としては望外の喜びでした。当時、ガリオア留学生は原則としてワシントンにある大学には配属しないという方針があったと聞いていたからです。

私も最初は、オクラホマ大学に行くことになっていたんです。それが出発の一週間くらい前になって、「オクラホマ大学じゃなくて、今度DCに非常に良い大学院がで

きたので、そこへ行け」と言われて、「サイス」に行くようになった次第です。

深田 当時のガリオア留学は一年ですか、二年ですか。

菊地 一年です。ところがその一年の終わりごろになって、希望があれば延長してもよいということになりましたね。私は実はコロンビア大学のロシア研究所へ行ってみようと思ったんです。

深田 特にロシアに関心があったのですか。

菊地 ええ、S・A・I・Sではソビエト・エコノミーなんていう講義も取っていたもんですから。ところが、外務省の人事課から、外務省のガリオア留学生は全部帰れということになり……。

深田 本省の方が忙しくなってきたということですか。

菊地 だんだんとみんな外へ出はじめましたから、在外事務所へ。その穴埋めに早く帰ってこいという事でした。

本省経済局へ配属

菊地 本省では経済局第三課へ帰ってきました。

深田 第三課というと？

菊地 調査局第二課で米州をやつて、また経済局第三課ということで、私のキャリアの初めはアメリカ一辺倒でした。五十一年から五十二年までは占領の末期で民間貿易も始まっていましたので、各国と通商協定を結ぶとか、更新するとか、そういう事が大きな仕事でした。特に中南米全部をかかえているものですから、ブラジル、アルゼンチンとかメキシコとかそういう国との通商協定。あのころエスクロー勘定なんて言葉がありましたよ、ね、そういうオープン・アカウントの貿易で、半ば政府貿易みたいなものでした。

それからもう一つ今でも覚えているのは、ちょうどその頃、在京アメリカ大使館か

ら「シークレット」というノートがきたんです。私、その時始めてシークレットというハンコを捺した外交文書を見ました。「コンフィデンシャル」以上に機密度が高いんだな、と思いながら開いてみたら、ココムに日本は入らないかというんですね。ココムはご承知のように一九四九年にアメリカの主導の下で出来て、NATO諸国を中心に、対共産圏輸出のコントロールをやっていたものです。これに、日本が加入しないかという誘いだったわけです。

深田 マルチの条約機構に日本が入るといふ話は、ココムがはしりだったわけですか？

菊地 そうですね。当時の経済局はそういう通商協定をやると同時に、アメリカとの通商航海条約締結の準備作業が始まりました。私自身の担当はパテントに関する条文でした。その研究会をやって、結局一九五三年に条約が締結されるんです。

深田 たしか自動延長でしたね。

菊地 ええ、十年間の自動延長。当時アメリカ大使館にウエアリング参事官という人が

いたのですが、この人がある日、私の課にノートを持ってきて、シンガポールが戦前から日本に投資しているんですけども、これを再び復活したい。ついては投資許可をもらいたいと、口上書で外務省に要請してきたわけです。課長は福井政男さんという通産省から来た人で、首席事務官は山本良雄さん。そのころは外国からの「融資」(インパクト・ローンと呼んでいました)はいいけれども、「投資」は困るといのが日本の態度でした。

吉田茂首相

深田 一九五四年までは吉田茂さんの時代であつたわけですが吉田さんについての印象は。

菊地 吉田茂さんは、高坂正堯とか萩原延壽とか、ああいう学者が誉めているように、やはり外務省の先輩として、戦後のあの混乱期、ことに日本人が精神的な拠り所を失っていた時に、一本心棒を通してくれたという意味では、偉大な政治家だつたと思うんですね。

もちろん彼の外交政策に対しては色々批判もあります。たとえば、中曽根さんあ

たりも、確かに吉田さんはすぐれた人だけれども、戦後の日本人の国防意識というか、安全保障意識というものを軽視したということと批判しておるわけです。しかし吉田さんとしても、永久に日本をああいアメリカに対する従属的な地位におき続けるつもりではなかったように思うんです。

深田 時代の反映だった。

菊地 吉田茂さんという人は、戦後の日本の政治家としてはかけがえのない人だったんじゃないか。

池田勇人とか佐藤栄作とか、それから私が秘書官として仕えた大平さんとかにいたる、吉田学校の系譜、その軌道を敷いた意味でも優れた人だったのではないか。

初の任地、ロンドン

深田 初の在外勤務はロンドンですね。それからワシントンですか。

菊地 ロンドンから、実はパキスタンに行ったんですよ。